

# 関東大震災で 大被災した横浜の復興

一九二三(大正一二)年九月一日、休養先の箱根強羅で関東大震災を体験し、徒步で四日かかつて横浜へたどりついて、焼け野原の市街に呆然とした。翌日から、富太郎は、市民の食糧の確保、住居の再建、生業の復興などに、実業界の仲間を集め、県や市の行政担当者と打ち合わせつつ、復興に取り組んだ。

富太郎の問題解決は、解決に当たる人材(二〇〇余名)を集め、各部のリーダーに据えて、総指揮を自分が取つていて、横浜復興会では、会長・総務部長原富太郎、計画部委員長井坂孝、市財政部委員長平沼亮三、港湾部委員長小野哲郎、都市計画部委員長渡辺利三郎、運輸交通部委員長若尾幾太郎、生業部委員長大浜忠三郎、貿易部委員長滝澤義一、工業部委員長中村房次郎、金融部委員長大久保利賢という組織を結成して臨み、復興に成功した。

横浜は、貿易で生きる街である。富太郎は、横浜貿易復興会も組織し、その会長として、復興の指揮を執った。

横浜の街が焼けたとき、集まっていた生糸五万五六〇七梱(じゅう)（行李）が炎上した。さうに輸送中を合わせると、被害額は六〇〇〇万円を超えた。この被害額は、製糸家が三一〇〇万円、輸出商が一〇〇〇万円、売込商が八〇〇万円負担することを決めた。貿易再開に向けて、政府の援助も仰ぎつつ、取組み、再生を果たした。富太郎の人生で、最大の問題解決であった。富太郎が居るところだが、人々を勇気づけていた。なお、横浜の街の賑わいを復活させるためには、歓楽街も必要といふことで、夜も明るい街づくりをしている。



今は残っていない「田舎家」のかつての様子 三溪園保勝会提供

# 美術品の蒐集と 三溪園の公開

芸術・文化を護り、  
実践して

富太郎は、実業家としての活躍と成功の一一方で、文化財的古寺の名建築を移転保護し、美術品の蒐集をしている。一九〇一(明治三十五)年、富太郎は、一家を引き連れて、本牧三之谷に移り住んだ。この地は一〇万平方メートルで、いくつかの谷や丘があつた。善三郎が購入し、山荘が築造されていた。富太郎は、この地の造園に取り組みつつ、名建築を相次いで移築した。

旧燈明寺本堂、旧燈明寺三重塔、旧東慶寺仏殿、臨春閣、春草櫨、月華殿、聽秋閣、旧矢笠原家など。

一九一一(明治四四)年、岡倉天心の依頼を受け、芸術家達の支援を開始した。横山大観・下村觀山・安田鞆彦・今村紫紅・前田青邨などである。富太郎は、下村觀山の「大原御幸繪巻」など、日本画家の作品を買い上げたので、画家たちは、良い環境で制作できるよつになつた。富太郎自身、幼少期から書画に精励し、書も絵画も多く残した。

故郷岐阜の伊奈波神社前にあつた水琴亭の移築に際して、三溪園の宮大工を引き連れて協力し、臨春閣を写した別棟を建て、幾つかの壁画を残している。富太郎が、岐阜へ来たとき、水琴亭で川魚料理をいただき、宿にするところが多かつた。富太郎は、幾冊かの画集も出している。

実業家であつただけに止まらないで、文化財を護り、芸術家を支援し、自分も芸道を嗜むといつ人生であった。芸道の一つに茶道があつた。三溪園には、各所に名茶室があり、茶会をしばしば催している。三溪は、益田鈍翁・松永耳庵とともに、近代三大茶人と云つたわれている。

# 報道に見る 原富太郎

化の里構想実行委員会が発足し、顕彰活動としての講演会や横浜三溪園観光旅行などが盛り上がってきた。その時期に、新聞記事が相次いで出るようになつた。その内容は、郷土の偉人原三溪の業績を讃え、偲ぶものが圧倒的に多かつた。



# 75年前、岐阜市米屋町に移転改築の料亭 「水琴亭」地域シンボルに



水琴亭の保存に向け開催されたシンポジウム「岐阜が生んだ原三溪」には、市民約400人が集まつた。岐阜市・未来会館

は、三溪園の建造にあたっては、三溪翁の書簡の原稿が現存する。これが、ついでに引いた大工と、岐阜市に引け、園内にある、臨春閣の一部を再現した部屋を増築した。一時雨の建築物が取り壊される運命にある中、多治見市の「三溪自らが描いたふすま絵も残されてゐる。」  
このうして、島郡笠松町の商家・杉山が、保存への第一歩として、愛する会では先月二十八日にシンボルジウムを開いた。岐阜が生んだ原三溪の「三溪園」に、県内にある歴史・文化財として、地域の資源として保存していくことを目的とした会である。

古美術の収集にもの情熱を  
注ぎ、茶の道にも情熱、新井惠美子さん、三溪園の母  
近代三天茶人と称され  
る。

約五万一千坪の広大な  
土地に、京都などから名  
建築の数々を移築したが、三溪園の業績や人々とな  
る「三溪園」といわれ、三溪園の魅力などを語  
る有名水琴亭移築の際に、熱心に耳を傾けたまた  
有り難い縁をもつて、この機会に、

重慶

A photograph showing a group of approximately ten people in a gallery setting. They are looking at several vertical scrolls of calligraphy hanging on a white wall. The scrolls contain Chinese characters written in a cursive or semi-cursive style. The people are dressed in a mix of traditional and modern clothing, including a man in a grey suit and a woman in a blue patterned dress. The gallery has a high ceiling with recessed lighting.

古来家業として古い建築物を見直す機運が高まっている。既に市民が主体となって歴史、文化的価値の高い民間の建造物を保存し、まちづくりに生かそうという運動が広がっている。

## 愛する会が保存・活用へシンポ

原三溪自筆の書、絵に  
見入るシンポジウム参  
加者ら||同

2005年(平成17年)11月5日 岐阜新聞掲載

市川春雄事務局長から鐘楼の高さの理由について説明を聞く  
児童・岐阜市柳津町上佐波等寺

## 生糸貿易商・原三溪や治水工事の技師

# 郷土の偉人、功績たどる



岐阜市柳津町宮上地区の小学生が、地域の偉人や偉業、歴史的建造物が造られた背景などを学ぶ「宮上こども三溪講座」が、同町上佐波の宮上ふれあい会館で開かれ、5、6年生30人が参加した。

(生駒美江)

宮上地区児童、ゆかりの地散策

市川春雄事務局長(68)が企画し「私たちが住む佐波つてどんなところ?」と題し、講演した。市川さんは明治時代に川が度々氾濫し農地の広がる現在の地形について、同地区を流れる境川が度々氾濫し農地の広がることなどを説明。治水に貢献した山田省三郎、技師として用水の整備、建設に関わった黒川治臣、生糸の輸出で財を成し日本の伝統文化の保護や芸術家の育成などに尽力した原三溪の功績を紹介した。

講演後、児童らは同

原三溪と花子  
テーマに講演  
岐阜市で22日

「岐阜学会」(会長・丸山幸太郎、岐阜女子大学教授)の第7回特別講座が22日午後1時30分から、岐阜市太郎丸の岐阜女子大学で開かれる。「岐阜を愛し

た原三溪と女優花子をテーマに、丸山会長が講演する。

実業家の原三溪は1868年岐阜市柳津町生まれ。生糸貿易や製糸業で成功、築いた富家ロダンのモデルになれた女優。晚年を岐阜市で過ごした。丸山さんは、2人

の古建物を移築した本の古建物を移築した。その人生について語る。花子は欧米で日本

の芝居を巡業し、彫刻



三溪園が誕生した頃の横浜市の状況について解説する加藤祐三さん＝岐阜市司町、みんなの森ぎふメディアコスモス

## 「原三溪と横浜」解説

顕彰団体  
三溪園園長が講演 岐

岐阜市柳津町出身の実業家原三溪（1868～1939年）を頭彰する「原三溪・柳津文化の里構想実行委員会」（廣瀬昇会長）の創立5周年記念講演会が25日、岐阜市司町のみんなの森ぎふメディアアコスモスで開かれた。三溪園（横浜市）園長の加藤祐三さんが「三溪と横浜—その活動の舞台」と題し、三溪とゆかりが深い横浜の地域性について語った。

三溪（本名富太郎）は20代で横浜市の生糸商の養子になり、生糸輸出や富岡製糸場の経営を行つた実業家として活躍。三溪園を開園するなど、文化財保護に

も取り組んだ。同会では岐阜市内の有志約70人が活動しており、講演会は三溪の日記をまとめた冊子「公私日記帳」の刊行を記念して開催。約200人が参加した。

鶴翔閣は古里岐阜の民家を模していた」と指摘し、市域の拡張や生糸貿易の好況を背景に人口が急増したことなどで、「それぞれの出身地の文化を持ち込む」とを歓迎する雰囲気があった」と紹介した。

2016年(平成28年)9月26日 岐阜新聞掲載